

Title	<共同研究報告>「京都における伝統の継承と生成」を現場(フィールド)の語りから学ぶ: フィールドワーク基礎演習の試み
Author(s)	やまだ, ようこ; 地見, 元博; 日根野, 健; 張, 貞京
Citation	教育方法の探究 (2000), 3: 82-96
Issue Date	2000-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/190236
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

「京都における伝統の継承と生成」を現場の語りから学ぶ

ーフィールドワーク基礎演習の試みー

やまだようこ・地見元博・日根野健・張貞京

発達教育論 基礎ゼミの概要

やまだようこ

発達教育論分野では、現場心理学の方法論を特色にしてきた。最近、フィールドワークは多くの学問分野において重視されるようになった（Atkinson, R. 1998, Glaser, B.G., & Strauss, A.L. 1967, 佐藤1992, 須藤 1996, 高橋他1998, 箕浦 1999, やまだ 1997など）。教育学では、文献中心の研究と現場の実践研究が乖離する傾向が強かったので、現場から学びつつ学問として立ち上げていくフィールドワークの方法論が待望される。心理学においても、自然科学的な実証的方法の精緻化にともなって、生態的妥当性に疑問がある研究や、細分化され型式化されすぎた統計的分析に疑問がもたれるようになった。しかし、従来は観察法、実験法、調査法、面接法のみが教えられてきており、フィールドワークの方法論や安定的データの分析方法は体系立てて教育されてこなかった。フィールドワークの基礎演習においては、今後、どのようなカリキュラムを組み、何を基礎として教えるのかという方法論自体の整備が必要であろう。

教育方法学基礎演習では、1999年度から〈発達教育論 基礎ゼミ〉として新規にフィールドワーク実習の半期授業を開始した。本報告は、その最初の試みである。この授業は、「フィールドワーク KYOTO ー伝統の継承と生成」というテーマで、京都の伝統を支え、伝え、創り、育てている人びととのインタビューを通じて、実際に研究しながら方法論を学ぶ実習として計画された。この授業の全体像については改めて詳しい報告が必要であり、本報告は、そのアウトラインにすぎないが下記にオリエンテーション資料の一部をあげておきたい。

フィールドワーク KYOTO ー伝統の継承と生成

京都の伝統を支え、伝え、創り、育てている人びととの対話

〈発達教育論・基礎ゼミに参加されるみなさんへのメッセージ〉

「発達教育論・基礎ゼミ」では、今年から新しく「フィールドワーク 京都」というテーマで

発足します。このゼミでは、現場（フィールド）心理学の方法論を学びながら、京都に生きる人びととの対話を深めていく作業（ワーク）をしていきたいと思えます。市井に生きるひとりひとりの人びとが、すべて私たちの教師です。彼らの「生の声」に耳を傾け、その人生の物語を聴き取ること、そこからは書物だけでは得られない「生きた言葉」から魂をゆさぶられるようにして学ぶことができるでしょう。

フィールドワークの合い言葉は、コミュニケーション（communication）、コミットメント（commitment 関わり・参加）、コミュニティ（community 文化的・歴史的遺産を共有する地域共同体）です。どの言葉にも含まれる「co-」は、「common(共同の)」を意味します。ひとりひとりが発する個別のオリジナルな「声」を大切にしながら、それを多声化して織物にしていく共同生成作業をすることが当面の目標です。

＜日常生活から「問い」を発すること＞

学問とは、「問うて学ぶもの」であります。学問にとって、もっとも大切なのは、答えを出すことよりも、問いを発することです。問いの出し方によって、答え方が決まってくるからです。今まで、正解を出すための勉強（強いて勉めること）はトレーニングされても、「問いの立て方」を学ぶ機会は、あまりなかったのではないのでしょうか。

フィールドワークの方法論にとって重要なのは、まず、「問い」を立てることです。それは、日頃当たり前と思って何の疑問も感じないでいる日常生活、ふだん何げなく見過ごしている人間行動を改めて見直し、「あれ?」「ここに、こんなものが?」と気づくこと、「どうして?」「なぜ?」と不思議に思うことから始まります。

以上のような、問いかけから授業が始まり、カリキュラムは、以下のように組まれた。

カリキュラム

1 ゼミのオリエンテーション。テーマ探索。

「京都の伝統はどのような人びとによって継承され、生成されているか」ブレインストーミング。＜個人活動＞ 情報収集。

2 各自の情報収集結果の発表。班構成。

＜班活動＞大きなテーマの設定。

3 フィールドワークの方法論1

問題の立て方(講義)。＜班活動＞テーマと目的の討論。

4 研究計画。

＜班活動＞研究計画の作成。目的・方法の具体化。

5 フィールドワークの方法論2

現場を見ること・聴くこと(講義)。＜班活動＞方法の具体化・インタビュー相手先との交渉。

6 フィールドワークの方法論3

インタビューのしかた（講義）。〈班活動〉 研究計画の完成・インタビューの実施。

7 データ分析の方法論1

語りのテキストを読むということ：一次データから二次データへ（講義）。〈班・個人活動〉インタビューの実施。インタビューの言語化（テープ起こし、一次データ：プロトコル・テキスト作成）。

8 データ分析の方法論2

何を意味ある語りとして選択するか？：二次データからカードへ（講義）。〈班・個人活動〉インタビューの実施。インタビューの言語化。二次データからカードへ。

9 データ分析の方法論3

発想法とK J法。 発表レジメ・報告書・論文のまとめ方（講義）。〈個人活動〉二次データからカードへ。

10 データ分析の方法論4

K J法実習（補講 一日集中実習）。〈個人活動〉K J法図解完成と考察

11 データ分析の方法論5

K J法図解による結果と考察の発表（各自のK J法図解発表と討論）。〈班活動〉各班の発表レジメ作成（A4, 8枚）。

12 研究発表会（各班の発表と討論）。

(13 班の全体報告書、および個人報告書の提出。報告書の添削、修正。)

(14 班の全体報告書完成。お礼のあいさつ)

この基礎ゼミには、学部2, 3回生の他に、大学院博士後期課程の院生もアドバイザーとして参画した。「自己がよりよく学ぶためには、他者に教えてみよう」という、実践的・共同生成的学び論をもとに、学部生は「研究方法」を、院生は『「研究方法」の教育方法』を、相互に共同生成的に学ぶ体制をとった。班は各自の関心によって、5班に分かれた。各班のテーマと構成は以下のものであった。

1班 和菓子における伝統の創造・引継・伝達

小澤美穂・中島理恵・新井亮介・藤野友紀（院生）

2班 町家に住む人々の生活 ー住めば都の家意識

大島利美・遠藤真紀・相川崇・小島安紀子・やまだようこ（教官）

3班 時代とともに生きる先斗町

相川睦子・門田久美子・新里真世・保坂裕子（院生）

4班 学生街で喫茶店を続けるということ

吉田昭子・矢島修・松本学・田垣正晋（院生）

5班 お寺における世代の継承—過去から現在、現在から未来へ—

地見元博・日根野健・張貞京（院生）

半期の実習としては過密スケジュールで、課題が多々あったが、学生、院生ともに参加意欲が高く、熱心に演習に参画した。各班、いずれも力のこもった報告書が提出された。以下に掲載する報告書は、5班のもので、学生から提出されたものに、やまだが手を加えて編集した。1例ではあるが報告書を読んでいただくことで、ゼミの内容が具体的に理解していただけると思う。ゼミは始めたばかりで試行錯誤も多く、未熟で反省点も多いが、批判や意見を賜り、より良いものにしていきたいと願っている。

引用文献

- Atkinson,R. 1998 The life story interview. Sage.
- Glaser,B.G., & Strauss,A.L. 1967 The discovery of grounded theory:strategies for qualitative research. Aldine Publishing. 後藤隆・大出春江・水野節夫（訳）1996 データ対話型理論の発見 新曜社
- 佐藤郁哉 1992 フィールドワーク 新曜社
- 須藤健一 1996 フィールドワークを歩く 文化系研究者の知識と経験 嵯峨野書院
- 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一（編）1998 人間科学研究法ハンドブック ナカニシヤ出版
- 箕浦康子（編） 1999 フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房
- やまだようこ（編） 1997 ^{フィールド}現場心理学の発想 新曜社

謝辞

最後になりましたが、ご多忙な時期にもかかわらず、この演習の主旨を理解してくださり、快くインタビューに応じて下さった方のおかげでこの演習を行うことができました。未熟な私たちに多くのことを身をもって親切にお教えくださいました方々に、厚く感謝し、心よりお礼を申し上げます。

発達教育論・基礎ゼミ

お寺における世代の継承 ―過去から現在、現在から未来へ―

5班 地見元博・日根野 健・張 貞京（院生）

1 はじめに

教育方法学基礎演習〈発達教育論 基礎ゼミ〉において、私たち学生に課されたテーマは「京都の伝統を次の世代へ受け継いでいく働きと、伝統を受け継ぎながら新たに生成し育てていく働き、その両方の働きのダイナミックスを、具体的なインタビューを通じて考えること」であった。

このテーマに取り組むにあたり、ある寺の住職にインタビューを依頼することにした。この方を選んだ理由としては、京都生まれ京都市育ちで、古くから存続する寺の住職であったため、京都の伝統について何うには妥当と考えたからである。「京都の伝統」や「伝統の継承」を意識して、5班では、次のような目的を設定した。

「特にお寺における世代の交代（先代→自分、自分→跡継ぎ）に関する個人史・意識に注目し、一個人としてのお坊さんが、お寺で今まで築かれてきた慣習、人間関係などをどのように受容・理解し、何を次世代に残そうとしているのかを知る。」

2 方法

聞き手の一人が個人的に知っていた寺の住職、Xさんにインタビューを電話で依頼した。了解を得た後、日程等を調整しインタビューを実施した。インタビューの前に、最低限質問したい事項を質問シートに記入して持参した。また、インタビューの内容は語り手の許可を得てDAT (Digital Audio Tape) で録音した。

〈聞き手〉

- 1) 名前(所属) 地見元博(京大教育学部3回生)・日根野 健(2回生)
- 2) 調査年月日 1999年11月22日
- 3) 場所 Xさんの寺(京都市)
- 4) 時間 9時50分～11時30分

〈話し手〉

- 1) 年齢 41歳
- 2) 性別 男
- 3) 身分・職業 寺の住職
経験年数 住職になって4年、修行年数 30年程度
- 4) 出身地 京都市

〈インタビューの方法〉

- 1) インタビューは、主に地見が行う。必要に応じて日根野が補足を行う。
- 2) 録音 DATを使用。
- 3) 質問の順番は特に設けず、細かい質問をこちらから提示することを避ける。できるだけ大き

な質問を投げかけて自由に答えてもらう。そこで十分聞き尽くせなかったことについて、聞き手の側から細かく質問していく。

4) あらかじめ準備した、おもな質問事項は下記のようなものであった。

① 子どもの時に他の子どもと違うなと感じたことがあれば聞かせてください。

- * 生まれてから今までのことについて聞かせてください。
- * 兄弟はいますか？
- * 後継ぎを意識し始めたのはいつくらいですか？

② 今の仕事を継ぐときの苦勞について教えてください。

- * 檀家まわりなどについて教えてください。(どのような檀家さんが多いですか？ 檀家さんは時代とともに変わっていていますか？ 後継ぎをした時に檀家さんの目は気になりましたか？)
- * 先代(=親?)を意識しましたか？
- * 修行はどのようなものでしたか？
- * 大学などではお寺についての勉強などをされていたのですか？
- * 先代からお寺を継ぐときに難しいことはありましたか？
- * 檀家さんとの信頼関係を築くのは難しかったですか？
- * 今は信頼関係がどの檀家さんとも結べているのですか？
- * その他の苦勞

③ 現在の生活で苦勞していることや充実していることについて教えてください。

- * 仕事を通しての喜びがあれば教えてください。
- * 仕事を通しての苦勞はありますか？
- * お寺の仕事以外にもなにか活動をしていますか？
- * お弟子さんはいますか？
- * 寺の伝統・歴史のなかで自分の果たす役割を意識していますか？

④ これからお仕事を次の世代に継がせていくことに関してどうお考えですか？

- * 次の世代に引き継ぐことにどんな苦勞があるのでしょうか？
- * 次の世代にも残したいもの・ことはありますか？
- * 変えていきたいもの・ことはありますか？

3 インタビュー分析の結果

インタビューの分析は以下の手順で行った。録音したテープ(ロー・データ)を、会話プロトコルに逐語記述して一次データを作成した。逐語記録をさらに、一文章ずつに分解して二次データを作成し、二次データの中から重要と思われるものを選んでカード化した(三次データ)。そ

して、三次データのカードを用いて、K J法（川喜多1967）によって分析した。

以下はK J法によって分析したXさんの語りとその説明である。下線部は、全体を意味づける大きい表題である。前半部A・Bは日根野、後半部C・D・Eは地見が分析した。以下の記述は、Xさんの語りをもとに構成した。ただし、（ ）部分は、分析者の解釈である。

<前半部>

A. 長男に生まれてから子ども時代を経て、お寺を継ぐまで

長男である（すべてのはじまりは長男に生まれたということである。）

檀家回りを父と一緒にした

父親と一緒に檀家回りなどをするようになったのは、小学校4年生からである。衣を着て回るころなど見られるのは恥ずかしかった。しかし、一方で檀家さんに小さい頃からかわいがってもらったことが、後継ぎをする上で非常に重要であった。（後述するように、Xさんは特に違和感もなくスムーズに後継ぎをした。小さい頃からこのような活動があったからではないかと考えられる。）

子どものころ、寺の子どもということで周囲の子どもから（悪い意味で）特別扱いされるとことはなく、特に違和感もなかった。これには一つエピソードがある。小学校のときに校長先生が、生徒たちの前で「(丸刈りをしていたことに関して) 彼はお寺の子で、こういうことやから、すごい、えらいことなんや」と説明した。（このことが少なからず他の子どもたちに影響を与えたのではないか。また、Xさんにとっても印象深かったようである。）

Xさんはこのエピソードに関して、障害者の問題を大人が子どもに説明することの大切さを強調し、さらに同和問題・人権問題についても話が広がった。後者については、(お坊さんの) 研修会でも必ず1教科入っているそうだ。実際、仏教の世界でも差別戒名が問題になった。（Xさんは、そういう人権問題などに対しても強い問題意識を持っている。）

(跡を継ぐのに) 違和感はなかった

Xさんは、仏教系大学卒業後、日曜日や盆・彼岸の行事のときなどに寺を手伝いながら、会社に16年勤めた。4年ほど前に父親が亡くなられたので仕事を辞め、寺を継いだ。

寺を継ぐ準備をしないうちに、父親が亡くなると大変である。Xさんの師匠がそのような状況だったらしく、師匠はXさんに同じ思いをさせたくないということで、小学生からときどき父親の付き添いをさせていた。このおかげで檀家さんはXさんを小さい頃から見ており、父親の跡を継いだときには、特に違和感はなかった。

B. 受け継いだ「思い」・伝えたい「思い」

思いを受け継ぐ

Xさんは先代の「思い」を大切に思っている。一緒に活動したことを通して、寺や青年会の先

代の思いが伝わっている。「それを受け継ぐ義務がある」と考えている。これは教え込まれたものではないが、見ていて感じたことである。そしてそれを次の世代へと伝えていきたいと意識している。先代がつくった基盤を大切に活動が続けることが大切である。何かの活動を新しく始めることも、それを存続させていくことも、とても難しいことである。

会長としての個性

Xさんは現在（青年会の）全国の会長と都市の会長をしている。（会長としてのXさんの考えは）、ワンマンであってもいけないが、一方で個人的なところも出していかないといけない。

Xさんが大切にしていることは、若者の意見に耳を傾けることである。40代くらいの人に囲まれると、20歳くらいの人たちは萎縮してあまりしゃべらない。そこで、小グループで話し合ったり、居酒屋などの場で話し合うようにしている。意見を出しやすい状況を作ると、若者も意見を言ってくれるからだ。そういう意見をXさんがうまく拾い集めるようにしている。

人が好き

小さいときからXさんの周りには、いつも人がいた。子どものころ、家にはたくさんの方がいた（お手伝いさんやおじいちゃんおばあちゃんなど）。そういう環境のなかで育ったからか、集まってイベントや何かをすることが好きである。（そういうXさんが大切にするのは、人とのつきあい・縁・共感である。）お坊さんは人に好かれなければならない。Xさんの父親は、檀家さんと仲良くすることを大切にしていた。父親は、ただお経を読んだりお葬式をしたりするだけなのではなく、人間と人間のつきあいをとても大切にしていた。そのひとつの表われとして新年会がある。他のお寺ではあまりやっていないことで、Xさんの父親が始めた。以下に、その語りを引用する。

「檀家さんとは、『うちのおっさん、お経下手や』、『お話も下手や』、でもやっぱり檀家さん、人に好かれる、『うちのおっさんやないと、あかんねや』って言われるようにならんとあかんかな、て思いますしね。」

他にも、なぜXさんのお寺にその墓があるかは分からないこともあるが、それもやはり何かの縁でつながっていると考えている。

また、人に共感してその人のために何かをしてあげることが大切にしている。同情は絶対できない（してはいけない）が、同情ではない共感大切にしている。そしてその人のために何かをしてあげることが、結局いつか自分にも帰ってくる。

これに関しても一つエピソードがある。インタビューの前日に亡くなられた方がいた。その方は名古屋に住んでいるが、その方が亡くなられたら行くと約束したので、それを守るため、インタビュー後、Xさんは名古屋に向かわれた。そして、仕事でも友達関係でも、自分が暇なときに何かしてあげるのには誰でもできることだが、自分が忙しいときに（忙しいときだからこそ）「その人のために」という思いで行動することを大切に考えている。

＜後半部＞ 現在の仕事とそれに関わることへの意識

インタビュー後半では、Xさんの現在の仕事についての姿勢やこれからの展望、さらに後継者の問題などについて伺った。Xさんは現在、お寺の仕事はもちろんのこと、宗派の青年会（この青年会に参加しているのは、同じ宗派の住職を務めるお坊さんや、その他僧籍を持つ人々）の会長として、日々様々な活動をされている。

C. 青年会に関わる仕事

青年会の活動をできるだけ多くの人に知らせたい

会長として様々な活動の出発点として、「できるだけ多くの人々に青年会の活動を知ってもらいたい」「参加してもらいたい」と考えている。青年会の会員には、寺の住職だけでなく、会社員もいれば、大学生もいる。それぞれの会員が忙しい中で、何とか会に対して興味を持ち、参加してもらいたい。宗派に関係している人々にも情報を発信し、青年会に関心を持って欲しい。

「『あ、青年会がんばってんなぁ』なんかそういうね、思いも伝えたかったし。」

会報を読みやすいものに変えたい

上に述べた「多くの人に知らせたい」との思いから、Xさんは青年会の会報に着目した。会報は、以前からあったが、あまり読みやすいといえなかった。今では紙面は、コンピューターで自在に構成できる。そこでXさんは、会報に青年会の独自色を打ち出すことを思いついた。各寺院に置いて、思わず手にとって「あ、何やろー、面白いやん、これ。へえー」「読んでみようかな」と見てしまうような会報を作ろう。そして出来上がったのが、普通の寺では見かけない、斬新な構成の会報であった。

テーマを持った会報作りなどの活動

会報作りで工夫を凝らしたのは、視覚的な構成だけではなく、内容面でもテーマ性のある特集を組むようにしたことである。また、連載記事を充実させて、次の号まで読者の興味を引きつけるなど、「考えるだけタダ」という考えで、積極的に今までなかったアイデアを取り入れている。

「仏教系の青年会でこれだけの会報作ってんの僕は自慢してんねやけど、これだけ作ってるとこはないと思う。」

青年会の活動としてイベントの主催なども行っているが、その場合も「テーマ」に重きを置いて考えている。たとえば、「行動を起こしてみないことには反応はないよ」ということから、「打てば響く」というテーマでイベントを開催した。そのとき、テーマに沿ったトークだけでなく、「打って響かせる」ために、パーカッション奏者を招いて演奏会を開くなど、常にユニークな発想で活動している。

青年会の役の忙しさ／重要性

青年会の仕事は、非常に忙しいが、Xさんは、その重要性を大きく自覚しているので、多くの仕事や役を持っている。

D. お寺にまつわる仕事・課題

気分を転換するためのお寺という「場」

この寺は、繁華街から近く、常に喧燥と隣り合わせになっているからだろうか、Xさんは「場」としての「お寺」のあり方に非常に興味を持っている。にぎやかなところだけに、本堂に入るまでに、気分を転換する必要性を感じている。Xさんは本山の大きなお寺を例にとり、次のように語っている。

「山門入る。石畳がずーっと敷いてある。だんだん入って行って、木が植わってて、もみじとかね、あって、だんだん気持ちが落ち着いて行って、ずーっと行って、また中門っていう門があって、入ったら本堂行くまでに回廊があってね、お浄土を表してあるんですけども、だんだん気持ちが、落ち着いてきて、お勤め、手合わす。」

また、お香を焚くことにも、気分を落ち着かせてお寺という雰囲気を出す効果があると考えている。このような一連のプロセスが自分のお寺にも必要だとXさんは感じている。

このよう「気分を転換させる『場』の演出」という考えの集約が、次のような言葉であろう。それは、アミューズメントパークのアトラクションのごとく、一連の「流れ」といったものを重視しつつ、日常と違った世界へと、人々を導いていくという考えである。

「アミューズメントパークなんですよ、はっきり言うたら。」「その、やっぱりね、トリックやと思うんですよ。」

来てもらいやすいお寺作り

上記のような考えのもとでは、お寺を改修していくことも必要となる。Xさんは、檀家さんにも、お寺に気軽に来てもらうためにも改修を行った。本堂に椅子を用意して、正座がづらいお年寄りでも正座せずに済むようにしたり、建物の中の移動をバリアフリーにする、などの工夫をした。他にも、家族構成の変化に伴って小規模な改修をしたり、宗派開祖の〇〇年忌にあわせて老朽化した寺を改修するなど、建物の修理・改造は、Xさんの寺に関する問題の中で、少なからぬ部分を占めている。

跡継ぎなどの問題

a. 基本の考え

「お寺について、何か大変だと感じてらっしゃる問題がありますか」との問いに対して、Xさんは「お寺のことだけやったらそんなに問題ないですよ。」と答えられた。建物の改修の問題について先程の項で述べたが、これについても大規模な改修はすべて、宗派開祖の何百年忌など、一つの区切りにあわせて行われる法要のある年にあわせて行うため、予定が見通せるので心配していない。

b. 跡継ぎについて

跡継ぎについては、今年からお盆の檀家回りを手伝ってくれる人がおり、あまり心配はしていない。しかし、寺では大きな行事のある年があらかじめ分かっているため、計画を立てられるも

のについては、予定をきっちりと立てて準備を進め、万が一計画途中で何かが起こった場合にも、誰かに引き継いでもらえるようにしておきたい。

E. 「今」を支える根本的な意識

Xさんのお話の中から、様々な話題に共通する、いくつかの「思い」をあげることができる。その「思い」の根本的な意識を端的に表す言葉をひろってみよう。

「出会いは大切に」

Xさんは、お寺の住職という仕事について、人と出会う、ということを「この仕事をやっていて良かった」と思える点にあげた。また、以前会社勤めするとき、営業の仕事などで様々な場所を訪れ、たくさんの人と出会い、話をする機会を持ったことが、非常に勉強になったと感じている。また、常に「死ぬまで」勉強になることがあり、勉強に終わりはないという。

「最後はなるようにしかならない」

跡継ぎなどの問題に関しては、既に述べたように、計画的にできることはきっちりやりたい、と考える一方で、最後はどうなるかわからないとも考えている。それ以外の問題についても、これから大変なことはあるかもしれないが、何が大変になるかはよくわからないと思っている。そして、最終的には、なるようになるものだから、すべて阿弥陀様にお任せするという信仰に行き着く。

4 インタビュー分析結果の考察

目的に即して、インタビュー結果分析を考察する。目的は、「特にお寺における世代の交代（先代→自分、自分→跡継ぎ）に関する個人史・意識に注目することで、一個人としてのお坊さんが、お寺で今まで築かれてきた慣習、人間関係などをどのように受容・理解し、何を次世代に残そうとしているのかを知る」ことであった。

前半部から、まず、「お寺における世代交代（先代→自分）」を考えてみたい。Xさんは子どものころから一緒に檀家回りをしていたが、それが世代交代を非常にスムーズにさせたと考えられる。突然先代が亡くなったときに何の準備もしていなければ、当然あせらなければならない。檀家さんにとっても、急にほとんど面識のない人が檀家回りしてくるのでは違和感があるだろう。ところが、このXさんの場合には、檀家さんが受容的であったし、Xさんも今まで築かれてきた檀家さんとの人間関係を戸惑うことなく受容できた。これくらいに入念な下準備をしておけば、お寺にける世代交代もスムーズに行くということだろう。

次に、「お寺で築かれてきた慣習・人間関係の受容・理解」に関してである。この寺では、他の寺ではあまり見られない新年会が開かれる。この新年会は先代がはじめたものである。先代の人間関係を大切にする思いが、今の住職であるXさんにも伝わっている。Xさんは、先代に引き

続いて新年会を毎年開催している。そして単に新年会という形式を受け継ぐだけにとどまらず、先代の人間関係を大切にしたいという思いをもXさんが受け継いでいることがわかる。

もうひとつ見落とせないのは、青年会の会長として若者の声に耳を傾けながら、若者の意見を取り入れながら、新しいものを作っていこうという意欲である。

以上から、Xさんが次の世代に何を残そうとしているかが見えてくるように思う。すなわち、「人間関係を大切にしたい」という思いである。

後半部では、主に現在の仕事について、「青年会」と「お寺」の2つに分けてXさんの考えを整理してきた。そして、その中で浮かび上がってきたものが、第3の「根本的な意識」としてとらえられる部分である。この意識は、大きく分けて二つの信念「なるようになる」「出会いを大切に」からなっていると考えられる。そしてこれが、現実の問題に対するXさんの行動・考えの基軸をなしていると思われる。

まず、第一の信念について、考えてみよう。お寺に関する問題、特に跡継ぎに関する問題は、まだXさん自身の年齢から考えても具体化する段階にはない。とは言え、ここまで「あまり大変だとは思わない」と言い切ってしまうのは、やはりその背後に、「最後はなるようにしかならない」「仏様にお任せ」という信仰が強くあるからではないのだろうか。自然体で、非常に柔軟に考えていることがわかる。また、現在まで大きな問題が起こっていないことで、「最後はなるようになる」という自然体の姿勢が、より一層確信を持って、Xさんの中で強まっているようにも感じられる。この「なるようになる」という姿勢が、第一の信念だと考えられる。

第二の信念は、「出会いを大切に」である。「お寺」「青年会」どちらにも共通していたXさんの言葉に、「できるだけ多くの人に来てもらいたい（参加してもらいたい）」があった。以前の会社勤め時代を振り返った時にも、「出会い」が重要な経験として大きな位置を占めていた。この「出会い」は、現在の仕事においても、大きな原動力となっているようである。

青年会の活動の場合、会長に就任して、「なるべく多くの人たちに青年会に興味を持ち、参加して欲しい」と思った。そして、どうすれば会の活動に興味を持ってもらえるかを考えて、たどり着いたのが、青年会会報を刷新し、テーマを持ちつつ斬新な活動をすることだった。

また、お寺の場合、「出会い」はふたつの反対方向の活動になった。一方では、「檀家さんに気軽に来てもらえるようなお寺作り」という観点から、お年寄りにもやさしい設備の改良を行った。その一方、「アミューズメントパーク」や「トリック」という言葉に象徴されるように、日常と違う、気分を転換すべき「場」としてお寺を演出するという考えが生まれた。

以上から、現在の活動を支える意識として「出会いを大切に」という信念があると思われる。実際に「出会い」を重視しながら活動をすれば、そこで新たに得ることのできた「出会い」の魅力によって、より一層の「出会い」を求めることになり、それを大切にしようとする思いをさらに強めていくことであろう。

5 まとめ

以上、Xさんへのインタビューを、内容から前半と後半に分けて分析と考察をした。その結果、Xさんに一貫して語られた、一つの思いが明らかになった。それは、「人との出会い、人間関係を大切にする」ということである。その思いは、前半部では、新年会に代表されるようなお寺での人間関係のあり方や、宗派の青年会での会長としての姿勢に現れた。後半部では、青年会での具体的な活動方針や、多くの人にきてもらうための「場」としてお寺を演出するという考えとして語られた。

インタビューを実施する前、私たちは先代、あるいはそれより前から脈々と受け継がれているものとして、もっと具体的で形式的なものを想定していた。例えば、お寺の建物、様々な年中行事や、それを行う際の細かな作法・手順などである。しかし、意外にもそうではなかった。それは先代から続く「人間関係を大切にする思い」だった。これは今や住職自身が大切にしている思いでもある。もちろん、お寺の形式的な伝統を軽視しているのではない。しかしそれ以上に大切に意識していたのは、人間関係を大切にする思いであったということだ。このことは私たちにとって非常に印象深かった。

現代の日本で生活している私たちは何を大切にしているのだろうか。「大切なことは、お金でも学歴でもなく、自分のしたいことをすることだ、自己実現だ」という話はよく聞く。しかし今回のインタビュー後、いつの時代にも大切にされるのは、「人間関係を大切にする思い」すなわち「人間に対する慈しみの心」なのかもしれないと思った。

「自分のしたいことをする、自己実現する」などという考えに共通するのは自分への思いである。住職が先代から受け継いだ「人間関係を大切にする思い」は、逆である。他者への思いである。そう考えてもう一度インタビューを振り返ってみると、住職の言葉は他者への思いにあふれていた。このインタビューを通して「人間に対する慈しみの心」が、いつの時代にも通用する、とても大切なものだと感じかされた。

6 おわりに ー授業の感想（日根野 健）

「伝統」とは何だろうか。他の班の発表を聞いていても、「これが伝統」というものは、ひとことでは言えなかったように思う。伝統は、私たちのなかで確かなイメージとして存在するが、その実体はよく分からない。

私の考えはこうだ。伝統といわれるものには、ある程度固定した何かがある。お寺、和菓子、町家など、確かにある程度固定的な実体が存在する。それらには、私たち日本人が共有して持っている「伝統」というイメージがあるのではないだろうか。例えば、日本のことを何も知らない外国人が日本のお寺を見たとしても、きっと伝統を感じることはないだろう。日本の文化の中で

生活し、次第に伝統というイメージを共有するようになっていくのではないだろうか。

住職へのインタビューは、授業をさせておき、自分自身にとって非常に有意義であったと思う。先代の思いを受け継ぐこと、人との縁を大切に作る生きかた、身近な人でこのようなことを意識している人はなかなかいないと思う。そのようなことについて考えておられる住職の話は、私にとってとても新鮮で印象深かった。

インタビューを通して一つのテーマに切りこむことの難しさを知った。テーマについての考えをインタビューを通して引き出していくわけだが、インタビューで分かるのは結局氷山の一角にしかすぎない。何十年もの時を生きていくなかで、少しずつ少しずつできあがっていく考えというのは、その人の人格（ひとりの人間としての総体）とは決して切り離されるものではなく、理解するのが非常に困難である（厳密に考えれば不可能であろう。）その人のほんの一部を拾ってその人を理解したかのような気になってしまっはいけないと思った。

今回、K J法を使って住職へのインタビューを処理し、この論文が完成した。しかし作業の間ずっと私が考えていたのは、本当に住職の考えをきちんと理解してこの報告を書いているのだろうか、ということである。授業であるからしかたがないことかもしれないが、私のような若造が、何十年もの苦労を経て来られたかたの考えをまとめて、このような論文にしてしまうことは傲慢ではないかと感じた。

また、問いをたてることの大切さと難しさにも気づかされた。まず大切なのは、いろいろなことに疑問を感じることである。そしてその疑問を明らかにするために、たくさんの問いをたてる。問いの立て方によって、その答えも自然と規定されていく。どの問いを選ぶべきなのか、小さなことのように見えるがとても大切なことである。今後は、問いの立て方を意識していろいろな課題や問題に取り組んでいきたい。

発想法としてのK J法の素晴らしさも知った。最初はK J法の良さなど分からずに、「面倒だ」と思っていた。ところがいざ作業をはじめてみると、その良さに気付かされた。同じひとつの資料でも、今まで自分の中にあった枠組みとは違った見方で見ることができ、その資料の別の面に気づくことができた。発想法としてのK J法の威力を実感できたことは良い経験だった。

この授業は、しなければならぬことが多く非常に負担であった。しかしそれだけに得るところも多かった。後半、時間がなく、他の班の発表を十分に検討できなかったことが残念だった。一年間かけてもいい授業だと思った。とにかくいろいろなことを学べた良い授業だった。

引用文献

川喜多二郎 1967 発想法 中央公論社

謝辞

Xさんには、忙しい中、貴重な時間を割いてインタビューにご協力いただいた上に、資料と

して青年会の会報もご提供いただきました。また、ご家族の方には、突然お邪魔したにもかかわらず、快く迎えていただきました。未熟な文章ゆえに、Xさんにとっては不快に感じられるところもあろうかとは思いますが、その点はなにとぞご容赦下さい。やまだようご教授、そしてアドバイザーである張さんをはじめとする大学院生の方々には、いろいろとご指導いただきました。報告書の最後になりましたが、お礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(発達教育分野)